

中国の春秋時代の人物・豫讓が、主君の敵である趙襄子を暗殺しようと橋の下に潜んでいました。しかし、失敗し豫讓は捕らえられてしまいます。その際、趙襄子に懇願して衣服をもらい、その服を裂くことで無念を晴らした、という場面を描いたのが、「豫讓」です。

橋本雅邦が海軍省兵学校に勤め、製図をしていた明治十四年（一八八一）ころの作品です。このころ、油彩画を描いていた雅邦ですが、どのようにして油彩画を学んだかはわかっていません。

豫讓が目を見開き、衣服を切り裂こうとしている様子から、目的を達成できなかった悔しさがにじみ出ています。

三月九日(日)まで市

立美術館で開催している開館五周年記念特別展「没後百年 橋本雅邦」で、日本画が並ぶ中、唯一の油彩画である、この「豫讓」をご覧になれます。



豫讓
明治14年（1881）ころ
キャンバス、油彩
35.8cm×54.2cm
市立美術館蔵

どんぐり

編集後記

さほど風は強くなくても、とても寒い日が続きます。でも、梅は咲き始め、春の息吹が感じられます▶先日、高校生の息子がふらふらしながら帰宅し、体温を測ると39.9℃！インフルエンザと診断されました。幸い、小学生の娘をはじめ、家族にはうつりませんでした。帰宅時のうがい・手洗いは、効果があるようです▶いよいよ、本格的な受験シーズン。体調管理に気を付けて、受験生の皆さんが万全の状態で試験に臨めるよう、お祈りしています（SHI）



表紙の地図

川越ならではの
礼儀作法など

松返し

小江戸のならわし・その十一



昔の正月は、一年でいちばん大切な行事でした。三が日を家中全員が集まってお祝いし、やがて七日の七草という日の午前零時、大通りを青々と飾り付けていた門松を、とびの頭が一斉に抜いて片づけていきました。これを松返しといって、正月が終わり、ふだんの日に戻るといいう行事でした。しかし、足もとには、どの家の前にも門松を抜いた跡に、松の芯を折った一尺ほどの小松が立てられていました。まるで小さな正月がまだそこにいて、不思議な名残を見せているようでした。これを昔の人は「鳥総の松」といっていました。旧暦の正月、立春への橋渡しのように思えました。

*文化財保護協会顧問・宮岡正一郎さんから伺った話を、広報室がまとめました。